

日本語とフランス語の談話構成原理

井元 秀剛
(大阪大学)

Cutrer (1994)に始まるメンタルスペース理論を用いた時制論は、あらゆる時制形態を4つの基本スペース(BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT)の組み合わせで記述しようと試みるものであるが、その特徴は「談話構成原理」と呼ばれる談話の流れの中で課せられる構成制約にある。例えばフランス語の大過去はBASE からみて PAST+PAST の位置に EVENT があるということを示すものだが、この時制が使用されるためには、最初の PAST の位置に FOCUS がおかれ、その位置に V-POINT が移るといった段階を経なければならない。つまり Paul a dit qu'il était allé à l'hôpital la veille. という発話において、était allé という大過去を単独で分析するのではなく Paul a dit に続くものとして、スペース構成を考えるということである。このような趣旨で規定された「談話構成原理」は汎言語的な規則として時制構成を規定する意図をもったものだが、日本語にもあてはめようとするとは大幅な修正を余儀なくされる。発表者は井元 (2010) で、その修正を提案したが、不十分なものであった。今回の発表では前著以降の考察を示し、時制体系の普遍性と個別性を記述する試みを紹介したい。

参考

Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.

井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』 ひつじ書房.